

うしお

第 42 号

目 次

巻 頭 言	西 田 稔	1
鹿兒島 湾奥・魚類養場 環境調査	調査部 又木勝弘	3
	“ 九万田一己	
	“ 弟子丸 修	
	“ 上田忠雄	
ブリ子採獲試験報告 (第2報)	調査部 九万田一己	1 4
各 部 日 記		2 2
奄 美 短 信	大島分場	2 4
分 場 日 記	大島分場	2 5
編 集 後 記	編 集 部	2 6

鹿兒島県水産試験場

巻 頭 言

場長 西 田 稔

物が握れない、歩行困難になる。言葉がもつれ、食物がのみ込みにくく、目がかすみ、耳が遠くなり、手足はふるえ、ひどくなると気狂のようになって死ぬ水俣奇病を、実のところ我々是对岸の火事視していたが、最近になって県境の出水市内や20キロも離れた対岸の長島方面でもバタバタ死ぬネコの原因が水俣病らしいとさわがれ出して、我が家のひさしに焼え移つて来た感がある。

今日までのところ人には現れていないようだが地元の水産業界にとってはいち早くも大きな悪影響が現れ始めた様である。

出水や長島に水揚される水産物は買うなど申合せた部落がその周辺の農村部落に段々数を増すことになれば漁業者にとって死活問題である。

いつたい水俣病の原因は何であるか、水俣工場の廃液に含まれる重金屬化合物が海中の水産動物に入つて有機化したものと云われるが確定したのか。回游性のあるカタクチイワシその他の魚もその原因となるのか。本県の出水市その他の沿岸水も水俣工場廃水の影響を受けるのか？

何を対象に分析すべきか？

検出方法は？ その有害濃度は？

いろいろ判らぬところが多いし、中にはちよつと手がつけられぬ要素もありそうだ。

しかし事は相当広い範囲の漁家経済に関係するし、一方人命に及ぼす影響も予想されるので、泥縄のそしりを甘受しても最善を尽して我々の分野での調査研究を始めねばなるまい。

鹿兒島湾奥・魚類蓄養場環境調査（第一回）

調 査 部

鹿兒島湾奥・魚類蓄養場は本年四月、堤防築設し、以後毎月、定期的に定点観測（池内三点、池外三点、塩分、溶存酸素、水温）を行つているが蓄養池内の潮汐流、池内外へ流出入する汐の量、水門における海水の通過量、池内の塩分分布等、築堤に伴い、当然問題となるこれらの諸点については未調査であつた為、大潮時における第一回の調査を行つたのでその結果を報告する。

○調査期間 昭和34年7月7日～7月11日 5日間

○調査項目

- a. 満汐から干汐までの蓄養池内海水流出量
- b. 干汐から満汐、満汐から干汐における蓄養池内外へ流出入する海水の水門通過量
- c. 24時間水温観測
- d. 潮流板観測
- e. 最満汐及び最干汐時の塩分分布

調査日は今回は大潮を選んだ。

- § a. 7月9日における蓄養池内の最高汐（9時）から最干汐（15時20分）までの海水流出量

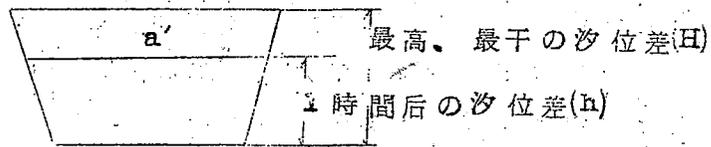
○算出法

この蓄養池は片側が熔岩であり、一方が砂地で、傾斜は相似ではないが、高潮面と、低潮面を、上辺、下辺とするとところの稚体と見做し得る。

従つて一時間で流出した水量は、最満汐面積と1時間後の表面積を上辺下辺とし一時間に減量した汐位を高

さとする稚体の体積と云う事になる。先述の様にこの稚体は
 稜線が相似でない為、この体積の算出に当つては、上面から
 下へ $\frac{1}{3}$ の部分の表面積を次式に準じて算出し、これに一時
 間の汐位を相乗した値を以つて1時間の減衰（流出）水量と
 した。（この場合、 $H=3$ 、 $h=2$ とする）尚、最高汐、及
 び最干汐時の蓄養池表面積はトランジット二基を用い、作図
 算出。その間、毎時の水位を測定した。

最高汐面積(A)



上図の様に

最干汐面積(a)
 最高汐時の表面積 : A

最干汐時の " : a

最高、最干の汐位差 : H

1時間後の汐位差 : h

1時間後の蓄養池面積 $a' = \frac{h(A-a)}{H} + a$ で表わされる。

以下 上式によつて 最干汐までの各時間毎の流出量を算出
 した値は下記のとおりである。

○最干汐の水位を零とした場合の各時間における水位

時刻	水位	各時間における落汐差
9時 (最高汐)	254 cm.	
10	234	> 20 cm.
11	182	> 52
12	131	> 51
13	81	> 50
14	36	> 45
15	4	> 32
15 ²⁰ (最干汐)	0	> 4

○落 汐 量

最満汐時 $1,609.3 \text{ m}^3$ 最干汐時 $1,501.0 \text{ m}^3$

○落 汐 量

時間毎の落汐量		経過時間の落汐量	
9~10時	4,260 m^3	9~10h	4,260 m^3
10~11	1,063.0	9~11	1,494.0
11~12	961.0	9~12	2,475.0
12~13	896.0	9~13	3,371.0
13~14	752.0	9~14	4,123.0
14~15 ³⁰	563.0	9~15 ³⁰	4,686.0 m^3
Total	4,686.0 m^3		

§ b. 満汐から干汐、干汐から満汐における養池内外へ流
出入する海水の水門通過量

○算 出 法

水門の中央部に広井式流速計を設置し、一時間を三区分して、一区分(20分)とし、一区分に3回測定、区分間平均流速を求め、これに水門の横断面積(巾4m×高さ)即ちその時刻における水門の汐位)を相乗して一区分の水門流量とした。

○水門における平均汐位と平均流速

	時 刻	水門汐位	水門における流速
流 出	9 ²⁰ ~ 9 ⁴⁰	2.33 m	1.2 $\frac{\text{cm}}{\text{秒}}$
	9 ⁴⁰ ~10 ⁰⁰	2.25	3.7
	10 ⁰⁰ ~10 ²⁰	2.12	6.2
	10 ²⁰ ~10 ⁴⁰	1.97	8.7
	10 ⁴⁰ ~11—	1.82	11.2

	時刻	水門水位	水門に於ける流速
流出	11 ⁴⁰ ~ 11 ²⁰	1.63 m	1.37 m / 秒
	11 ²⁰ ~ 11 ⁴⁰	1.40	1.55
	11 ⁴⁰ ~ 12 [—]	1.21	1.54
	12 [—] ~ 12 ²⁰	1.05	1.61
	12 ²⁰ ~ 12 ⁴⁰	0.90	1.59
	12 ⁴⁰ ~ 13 [—]	0.73	1.48
	13 [—] ~ 13 ²⁰	0.57	1.44
	13 ²⁰ ~ 13 ⁴⁰	0.42	1.35
	13 ⁴⁰ ~ 14 [—]	0.28	1.05
	14 [—] ~ 14 ²⁰	0.11	0.57
	14 ²⁰ ~ 14 ⁴⁰	0.05	1.1
		14 ⁴⁰ ~ 16 [—]	水門底床部、完全に露出
流入	16 [—] ~ 16 ²⁰	0.04 (5分)	1.5 (10分)
	16 ²⁰ ~ 16 ⁴⁰	0.14	1.5
	16 ⁴⁰ ~ 17 [—]	0.30	1.53
	17 [—] ~ 17 ²⁰	0.42	1.82
	17 ²⁰ ~ 17 ⁴⁰	0.60	1.37
	17 ⁴⁰ ~ 18 [—]	0.79	1.7
	18 [—] ~ 18 ²⁰	0.95	1.43
	18 ²⁰ ~ 18 ⁴⁰	1.16	1.87
	18 ⁴⁰ ~ 19 [—]	1.30	1.56
	19 [—] ~ 19 ²⁰	1.48	1.61
	19 ²⁰ ~ 19 ⁴⁰	1.67	1.61
	19 ⁴⁰ ~ 20 [—]	1.85	1.52
	20 [—] ~ 20 ²⁰	2.00	1.62
	20 ²⁰ ~ 20 ⁴⁰	2.14	1.41
	20 ⁴⁰ ~ 21 [—]	2.26	1.0

9月1日 午後 2時 33分 33分
 9月1日 午後 2時 40分 40分

尚流速計で感知出来ない微流速についてはグラフから推定した。この様にして最満汐から、最干汐、最干汐から最満汐までの水門流量を連続的に測定算出した結果を次に示す。

経過時間の水門流量

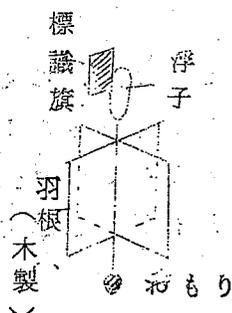
時刻	水平平均水位	水門流量	時間	水門流量
9:20 ~ 10	2.5	5538m ³	9:20 ~ 10	5538m ³
10 ~ 11	1.97	2431.9	9:20 ~ 11	2965.7
11 ~ 12	1.41	519.56	9:20 ~ 12	6161.5
12 ~ 13	0.89	201.87	9:20 ~ 13	6178.0
13 ~ 14	0.42	80.71	9:20 ~ 14	6985.1
14 ~ 14:40	0.08	32.0	9:20 ~ 14:40	9017.7
14:40 ~ 16	0	Total 9017.7m ³		

16 ~ 17	0.16	324.8	16 ~ 17	224.8
17 ~ 18	0.6	1090.4	16 ~ 18	1315.5
18 ~ 19	0.14	250.34	16 ~ 19	581.87
19 ~ 20	1.7	378.39	16 ~ 20	750.35
20 ~ 21	2.13	286.41	16 ~ 21	1045.67
21 ~ 21:40	2.35	453.1	16 ~ 21:40	10915.8m ³
		Total 10915.8m ³		

§ o. 24時間水質観測

別表のとおりである。

§ a. 潮流板観測



左図の様な潮流板を投入しその移動をトランシット二基で以つて追跡しその軌跡を別図の様に作製した。

§ e. 最満汐及び最干汐時の塩分分布

最満汐及び最干汐時にて丸馬船で蓄養池内の任意の点を採水。その点をトランシットで測位して塩分分布図を別図の様に作製した。

○ 考察と要約

- 1 蓄養池内海水の大潮時に於ける落汐量は約4万7千トンである。蓄養池内海水総量が大潮時の最高汐時に於いて161000トン（蓄養池等深線図より算出）であるので、その約 $\frac{1}{4}$ の海水の流出が見られる。又、落汐開始1～2時間で総落汐量（47000トン）の約 $\frac{1}{3}$ （15000トン）が、流出し去る。
- 2 水門を通過する水量は落汐時に約9000トン、はり汐時に約1万トンで、蓄養場落汐量（47000トン）の約 $\frac{1}{4}$ ～ $\frac{1}{5}$ と云う事になる。換言すれば残り約37000トンは堤防の間隙から通過する事になる。
- 3 堤防の長さは約80mで水門の中は4mであるから、若し水門を流出入する量が全体の $\frac{1}{20}$ であれば水門

観定は無意味と云えるが調査の結果上記のとおりで水門は比較的その効果を發揮している事になる。

更に本堤防が古くなれば堤防の間隙が塞つてしまうだろうから、更に水門通過水量は増加するだろうと考えられる。

3 落汐時の水門通過量(9000トン)とハリ汐時のそれ(10900トン)との差は1900トンとなる。これは潮汐表からも水門における汐位からも凡そ5-7%の差が見られ結局当日の潮汐高の差によるものと思われる。

4 水 温

表面水温の最高は16時の28.2°C、最低は23-24時の25°Cでその間約3.2°Cの昇降が見られる。

5米層では夜間と午前は比較的溫度変化は少なく25.2°Cと25.6°Cの範囲に収まるが11-16時の間において12時と16時に高水温(26°C、26.6°C)15時に低水温(25.5°C)を示している。

時間的には表面と全層24時-1時に最低、16時に最高を示す。表面水温より平均0.7°C-2°C低くなっている。底層は表層、5米層に比べ溫度変化は非常に激しい。最低21.1°C(1時)最高24.6°C(20時)溫度差3.5°Cの範囲で、その間約6時間の周期を以つて低水温部を形成している。

干満と水温との關係を見ると表層と5米層では21時と16時の満汐、干汐における潮止りの状態で水温は高くなっている。

底層では満汐、干汐時に比較的高く、その中間(汐の移動時)において低水温部を形成している。

○表層：落沙開始後四時間は一線に幾分か動つて移動するが最干沙の時間前で池中央部では逆の方向に移動を始め渦状に不規則な軌跡を画いている。

○底層：落沙開始の時間位は表層と類似の傾向を示すが以後逆の方向に移動し池中央部から稍奥の部分では、最干沙の時間前において殆んど沙は動かない。

(中央部における流速 $5.0 \sim 6.0 \frac{m}{hr}$)

③ハリ沙時の潮流板の移動

ハリ沙開始後、沙は池奥に向つて移動するが最満沙の時間前において反転する。

(中央部における流速 $4.0 \sim 5.0 \frac{m}{hr}$)

又全般的に見て、干溝に応じての沙の移動が単に左右に動くのではなく、細長い池を熔岩側から砂地に向つて斜めに横断する形をとっている。

(中央部における流速 $4.0 \sim 5.0 \frac{m}{hr}$)

以上全般を通じて、落沙、ハリ沙時に部分的な渦流（潮流板観測図参照）や上下流（水温観測図参照、表層、5米層と、底層の水温変化が互いに逆の傾向にあるところから上下流が考えられる）があるものと察せられるが水門或は、堤防の間隙から干溝に応じて、流出入する約47000トン（計算値）の海水が蓄養池内、外の海水と均一に置換されるものではなく、恐らく湾奥の海水は、池中央部附近迄の間を、往復するだけのものではないだろうか。

塩素の分析結果及び分布図は別表及び別図の通りである。

最満沙時における塩素分布は水門附近が最も高く170 Cl%以上で、奥に向つて減少し奥内では130 Cl%

水門附近では $140\text{Cl}\%$ 以上で奥に向つて減少し奥内では $130\text{Cl}\%$ 以下で最満汐時と殆んど同一値を示した。

このように水門附近が低塩素量を示したのは奥内の海水が干汐時には水門附近まで分散する結果と思われる。

又最干汐時において熔岩岸が少々高い結果になっているがこれは満汐時に熔岩の間に浸入した海水が、干汐時に流出した結果熔岩岸が少々高い値を示したものと考える。

これら兩者の分布図から蓄養場内の表面水の移動を考察すると最満汐時に於ける等塩線は水門より奥内に向つて湾曲していることから表面水の移動は殆んど水門から主として行われるものと思われる。

次にこれら干満兩者の同一塩素濃度の海水を同一海水と考へて表面水の移動距離を考察すると満汐時A点($130\text{Cl}\%$)の海水は干汐時にはC点まで移動し、又満汐時B点($135\text{Cl}\%$)の海水は干汐時にはE点まで移動し、又満汐時C点($140\text{Cl}\%$)の海水は干汐時にはH点まで移動し、又満汐時D点($145\text{Cl}\%$)の海水は干汐時にはJ点即ち水門附近まで移動するものと考えられる。

以上の考え方から満汐時にD点より水門間の海水は干汐時には水門外にまで流出し又満汐になると水門外の海水は蓄養場内に流入して内外の海水の交流が行れると、考える事が出来るが、満汐時にD点より奥内の海水は普通の干満の差では蓄養場内を平行移動するのみで蓄養場外の海水の交流は行われ難いことが察知出来る。一般に内外海水の交流の行われるのはD点より水門側の海水だけであろう。この様に奥内の海水は殆んど静止している様な状態で且塩素量

も少なくて魚類の発生には不都合なためか、魚類の発生は水門附近に比して奥内海部が減少しているようである。

塩 水 質

最 満 汐 時				最 干 汐 時			
St	Cl ‰	St	Cl ‰	St	Cl ‰	St	Cl ‰
1	1316	27	1504	1	1427	17	1362
2	1273	28	1524	2	1461	18	1359
3	1288	29	1557	3	1240	19	1431
4	1293	30	1603	4	1294	20	1434
5	1327	31	1613	5	1283	21	1432
6	1361	32	1601	6	1319	22	1432
7	1367	33	1585	7	1324	23	1413
8	1349	34	1619	8	1310	24	1400
9	1349	35	1596	9	1350	25	1402
10	1400	36	1592	10	1378	26	1414
11	1419	37	1612	11	1346	27	1418
12	1430	38	1619	12	1360	28	1434
13	1410	39	1627	13	1360	29	1440
14	1400	40	1559	14	1375	30	1440
15	1393	41	1562	15	1378	31	1431
16	1408	42	1638	16	1367	32	1422
17	1477	43	1651				
18	1498	44	1664				
19	1490	45	1679				
20	1484	46	1723				
21	1485	47	1716				
22	1496	48	1712				
23	1495	49	1653				
24	1504	50	1649				
25	1521	51	1565				
26	1477	52	1562				

7月9日~7月10日

8時時間 水温観測

時刻	水深	水温	時刻	水深	水温	時刻	水深	水温
7月9日 20時	0	22.40	21時	0	22.29	22時	0	22.25
	5	22.4		5	22.24		5	22.27
	底	22.6		底	22.05		底	22.15
22時	0	22.6	23時	0	22.33	24時	0	22.75
	5	22.3		5	22.28		5	22.67
	底	22.1		底	22.2		底	22.15
23時	0	22.0	24時	0	22.37	25時	0	22.73
	5	22.3		5	22.3		5	22.67
	底	22.30		底	22.35		底	22.43
24時	0	22.0	25時	0	22.4	26時	0	22.68
	5	22.3		5	22.5		5	22.65
	底	22.1		底	22.38		底	22.6
7月10日 1時	0	22.25	2時	0	22.66	3時	0	22.66
	5	22.28		5	22.56		5	22.60
	底	22.1		底	22.30		底	22.30
2時	0	22.25	3時	0	22.66	4時	0	22.66
	5	22.33		5	22.60		5	22.60
	底	22.00		底	22.30		底	22.30
3時	0	22.3	4時	0	22.69	5時	0	22.69
	5	22.3		5	22.60		5	22.60
	底	22.28		底	22.22		底	22.22
4時	0	22.5	5時	0	22.25	6時	0	22.25
	5	22.35		5	22.55		5	22.55
	底	22.77		底	22.3		底	22.3

	0	214		0	219
5時	5	231		5	215
	底	236		底	235
	0	253		0	282
6時	5	2535	16時	5	262
	底	2287		底	2299

水技： 又木勝弘・九万田一己
 調査部
 水技補： 弟子丸 修・上田忠雄



ブリ仔採捕試験報告 (第2報)

調査部 九万田一己

前報に引続き第5回～第7回の試験経過を報告する。

※ 第5回

- § 期間 昭和34年8月15日～16日
- § 根拠地 山 川 港
- § 方法 前回と同様

§ 試験経過

5月15日 8時30分、鹿兒島港発、NE~SEの
 風つよく視界悪し
 12時—10分 山川港着
 16日 7時、山川港、Wの風3~SW3
 操業困難のため、11時調査打切。
 山川港避泊
 17日 5時、山川港発
 9時~13時30分、辺察沖にて操業。
 24時、蕃養場着
 18日 7時30分、蕃養場発、漁協に連絡の上、
 帰鹿

§ 試験結果

別紙のとおり

§ 調査海域の海況

5月15日	WT (°C)	Cl (‰)
7h	21.2	19.07
8h	20.4	18.98
9h	20.4	18.98
10h	21.2	19.15
17日		
5h	19.8	18.64
6h	21.4	19.24
7h	22.4	19.25
8h	21.8	19.30
9h	20.2	19.20
10h	20.4	19.22
11h	20.3	19.25
12h	20.4	19.15

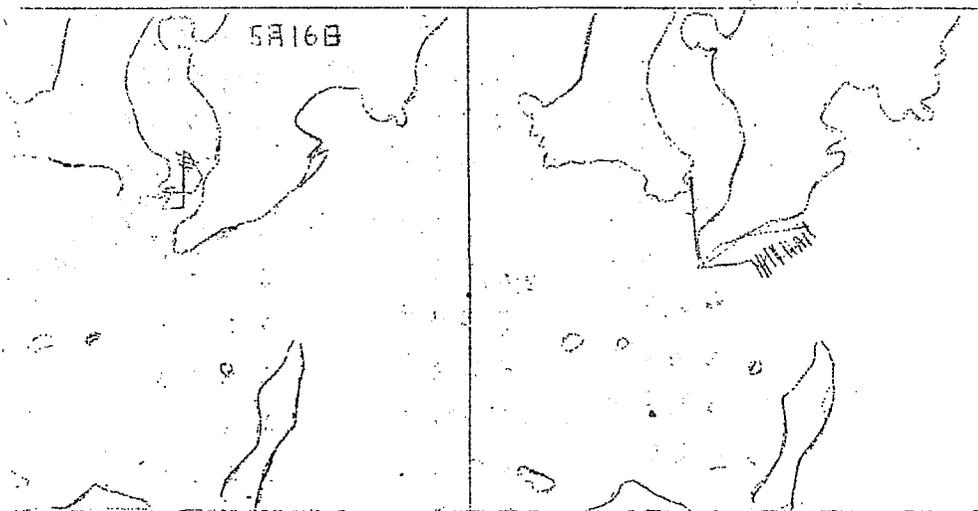
魚体の大きさ (5月37日採捕分)

	FL (mm)	BW (gr)
Max	3200	240
Min	1200	0.20
Ave	2389	0.71

試験結果

日	時間	漁具	稚魚 ブリ	魚 他	場所	備考
16	307~ 920	夕毛網	440	5	知林島沖	航尾 海鏡 中死 一約
17	300~ 1325	"	1597	3	辺塚沖	
	345~ 1330	紗網	2392	0	"	

調査航跡図



§ 期 間 昭和34年5月28日～30日

§ 根拠地 鹿児島港

§ 方 法 前回どおり

§ 試験経過

5月28日 22h15m、鹿児島発
 29日 05h、辺塚沖着、12hまで操業。
 18h45m、鹿大水産学部沖着
 プリ仔1500を試験用として密養。
 21h、牛根密養場着
 30日 プリ選別、8h20m、牛根発
 10h20m、鹿児島着

§ 試験結果

別紙のとおり

§ 調査海域の海況

5月29日	WT (°C)	Cl (‰)
6h	20.80	12.08
7h	20.85	12.08
8h	20.90 (快晴)	風: W1.
9h	21.6	ウネリ: 2)
10h	21.6	
11h	21.3	
12h	20.9	
13h	20.8	

魚体の大きさ

	FL (mm)	BW (gr)
Max	8200	50
Min	2400	0.1
Ave	5100	1.5

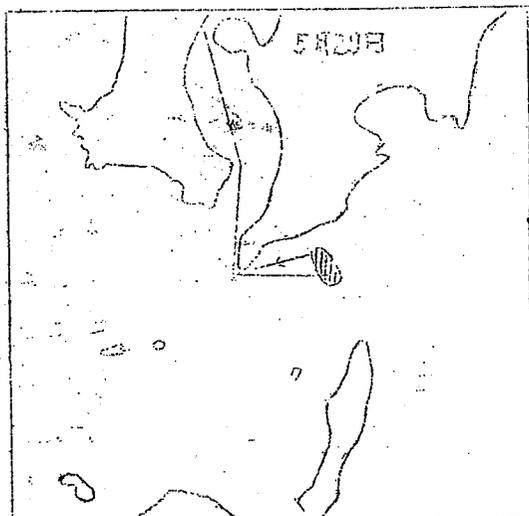
考 考

ブリは連日、約7~8割のものが多く、船を近づけると流が速くはなれて(深さ4~6m)採捕困難。
 流況に連なる流れ藻においてこの傾向が大きく、藻から魚が逃逸する。一塊りになつた流れ藻のものは逃逸が少い。

試 験 結 果

月 日	時間	漁具	種 魚		漁 場
			ブリ	他	
5.25	530~ 1020	タモ網	337		迎家沖(佐多岬東方)
	540~ 1155	抄 網	3344	11	"

調 査 航 跡 図



第 7 回

§ 期 間 昭和34年6月27日～30日

§ 根 拠 地 山 川 港

§ 方 法 前 回 と 同 じ

§ 試 験 経 過

6月27日 10h30m、鹿児島発
17h 山川着
28日 6h 山川発。佐多岬～辺塚沖から
枕崎へ向う。
17h30m、枕崎着
29日 6h 枕崎発
辺塚沖へ向かう。
19h 山川着
30日 6h 山川発
鹿児島湾口調査
18h 鹿児島着

§ 試 験 結 果

別紙のとおり、6月29日、佐多岬沖S区入渚の地点で
流れ藻の小群を発見しただけで、ブリ仔5、カンパチ仔9
を採捕した。
第6回試験までは、流れ藻につく稚魚は殆んどがブリ仔
(95～99%)であったが、今回は次のとおり、他の稚
魚が103尾で、約88.7%を占めていた。

◎ブリ、カンパチ以外の稚魚の種類と尾数

種 類	尾 数
オヤビツチャ (仔)	61

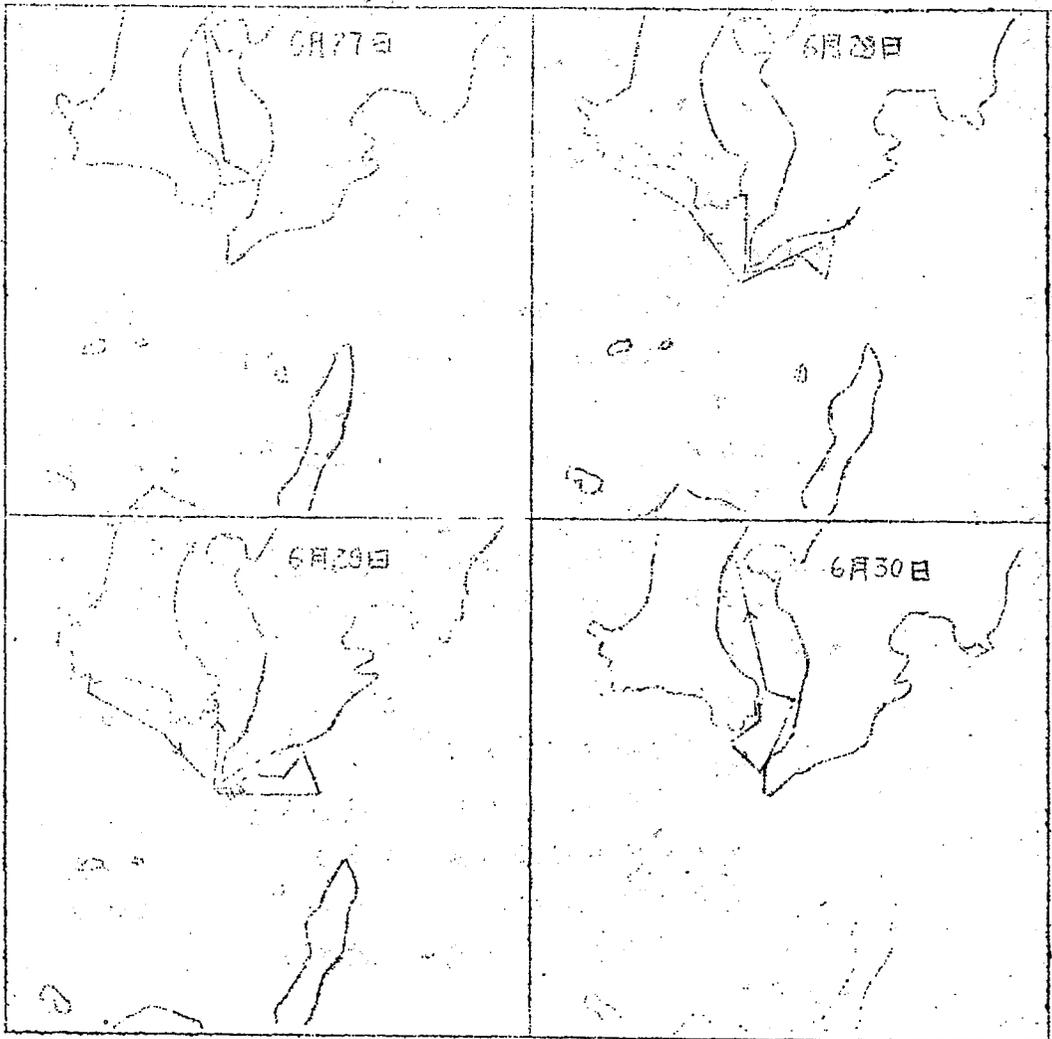
カワハギ		(仔)	1
カワハギ	Sp	(仔)	1
イシダイ		(仔)	1
メダイ		(仔)	18
カニ	Sp		3

§ 調査海域の海況

日	時間	WT (°C)	Cl (‰)
6月27日	11h (沖小島前)	25.3	18.58
	12h	25.1	18.59
	14h (指宿沖)	24.6	18.62
	(薄曇り、風SE4、波浪3)		
6月28日	6h (山川港外)	24.9	18.33
	(快晴、風NE3、波浪2)		
	7h	24.0	18.88
	10h	23.2	19.10
	12h 30m	25.3	19.16
	(佐多岬とテ台沖)		
	17h (枕崎港外)	26.0	19.14
6月29日	7h	24.2	17.99
	(枕崎立神瀬沖)		
	(快晴、風NW2、波浪1)		
	9h 40m 長崎鼻沖	26.0	19.20
	11h (佐多岬沖)	23.6	19.06
	(快晴、風SE3、波浪2)		
6月30日			

7 伍 (長崎鼻沖)	2 4.5	1 8.6 8
7 伍 ⁵⁰ (灣口中央部)	2 6.0	1 9.1 7
5 伍 (立見崎前)	2 5.4	1 9.1 1

調 査 航 跡 図



各部日記

○製造部日記

- 7月16日～25日 カツオ塩辛タイ色防止試験
7月20日 熊毛郡水産振興協議会出席（とび魚対策について）
7月22日～23日 ソーセージ製造試験
7月24日、27日 ミリン干製造指導
7月31日 串木野市水産係、税所氏「ふかたれ」の件について来場
8月5日、13日 ミリン干製造指導
8月10日～12日 ソーセージ製造試験
8月15日 カツオ節工場産地診断打合せ

○養殖部日記

7月異動・・・養殖部は大めれにめれました。現員は下記のとおり5名で1名減となりました。しかも水流技師は着任早々養まん技術研修のため静岡県水試浜名湖分場に出張、又新村技師はマベ採苗研究のため大島分場に9月まで残留です。結局目下のところ、わが養殖部は部長以下3名で大奮闘しています。新しい顔ぶれと転出者は次のとおり

転出者

部長	豊田茂樹（水産課）	北山易美（漁政課）
技師	水流 実	前田耕作（大島支庁）
“	瀬戸口勇	永山松男（垂水地区改良普及員）
“	新村 巖（大島分場）	山口昭宜（大島分場）
技補	小松光男	

7月22日 まぐり増殖効果調査（笠 沙）

7月27日～31日 黒ちよう真珠核入

8月1日 タコツボ投入指導 (鹿兒島市)

8月2日～13日 ハナヤナギ資源調査

種子島、屋久島、口永良部、三島村

鹿大：田中教授 阪大：竹本経授も参加

8月19日 ハナヤナギ移植・・海霧。 はかまごし

8月20日、21日 真珠核入指導・・垂水漁場

○ 漁業部日記

7月23日 照南丸上桟 (山川造船所)

8月11日 鹿兒島市漁協「タコつぼ投入試験」立会
(塩田技師)

8月18日 下関水講学生来場

○ 調査部日記

8月1日～11日 阪大、鹿大、本場共同調査で
熊毛地方のハナヤナギ棲息地、分布調査
を行う。

途中 台風6号 に遭遇して調査困難で
あつたが所期の目的を果たした。

8月10日～15日

魚類餌料効果試験 於・養養場
弟子丸、上田。によるS.P. 餌料予備試
験も終了したので いよいよ本格的実験
に着手した。

大島は台風の遠路とまで言われており台風シーズンともなると島民一同悩まされることばかり。被害の心配は勿論、鹿児島本土からの連絡船は欠航、といった状態で郵便物始め新聞等は遅れ本土との連絡は取れず、街の市場も食糧品はカンバツと云つたところ。8月上旬の4号台風では10日ぶりに本土との船便とあつて、普通でも混み合う船付場は戦場のような騒ぎで乗船切符は発売中止といった極満員状態であつた。

◎ 8月10日より奄美大島にも喜界島～鹿児島間の空の定期便が開設された。併し郡民の生活がそれだけ近代化したかという、そうとは云えない。実際の生活は矢張り船便を待たぬと一步も前へ進まぬと云う実情である。勿論吾々公務員には片道〇〇兼という高価な旅費では到底望めぬことであらう。

◎ 7月行われた異動により分場においても島山分場長外4名と云う大異動であつた。願るに実験室、養魚池、マベ人工採苗タンク、加工場及び漁具倉庫、削室の建設、並びに昨年大火により事務所等焼失による仮事務所及宿直室の建設と多忙な期間ではありましたが、その業績は偉大なものであります。又5名の方々には終生忘れることの出来ない分場生活であつたかと思ひます。

今後共御指導の程宜敷くお願いいたします。

今回、谷元新分場長外4名の新任の方が見え、分場長より「又新たな気分で大いに頑張つてほしい」とのあいさつがあり、一同頑張つております。

世間では今一般に夏枯れと云つたところだが、分場では一番

多忙な時期である。漁業係では32、33年度に引継ぎ8月
4日より「さんご漁業調査を開始した。

奄美さんごも昭和31年度を峠として下降を辿りつゝあるが
今年こそはと新漁場発見に頑張っている。

製造係では、かつお節製造試験を近日中実施する計画である。

養殖係は昨年マベ人工受精に成功のメドを付け稚貝の量産的
研究に励んでいる。

— S . / 5 —

S . S 生

分 場 日 記

- 7月15日～8月14日 マベ人工受精実験
- 7月25日 谷元新分場長着任
- 7月27日 島山前分場長赴任のため出発
- 7月31日～8月3日 探礁丸上架
- 8月1日 石神、川上技師赴任のため出発
- 8月2日～8月15日 第一次サンゴ漁業調査
- 8月3日 ライカイ機試運転
- 8月5日 瀬木主事赴任のため出発
- 8月9日 削機試運転
- 8月10日 徳留技師着任

編 集 後 記

- 一箇毎に肥大する魚体、まのあたりに見る湾内八田網によるアジである。

数千、数万貫の魚群の栄養源を包含するポリウームにあらためて感歎する。いわんや、外洋においてはや、である。

全国的な蓄養ブームも先づ餌の解決から、本場弟子丸、上田、のS.P餌料試験も軌道にのりつゝあることを知らせる。

- 酷暑しきり、む一つとする話で恐縮。

難解な書は鉄筋コンクリートに打ち込むタガネである。

はねかえされ うちかえされて歯がたゝぬ。

現実に可能な試験規模で立向う漁業試験もこれに似ている。やるうちにかくされた 自然の扉の開かれるのを期待しよう。

うたぬ鉄砲はあたらぬと、人の云う。